

中学校・高等学校における英語読解力指導について

教育実践と省察のコミュニティ2012、開催さる

8月19日・20日の2日間にわたり「教育実践と省察のコミュニティ2012」が長崎大学教職大学院で開催された。今回で3回目となる。今年度のテーマは「中学校・高等学校における英語読解力指導について」。

1日目は「教育実践研究コミュニティ長崎」と題され、パネル展示による研究成果の経過報告を中心としたディスカッションが開催され、会場は活発な情報・意見交換が行われた。2日目は「自由に広く学び合うコミュニティ」と題して本学職員3名による基調提案、中学校及び高等学校教諭及び院生の計4人による話題提供がなされ、その後、筑波大学大学院の卯城祐司教授によって『英語リーディングの科学：「読めたつもり」の謎を解く』と題された講演会が続いた。最後に行われた自由討議も活気に満ちたものであった。

職員、院生をはじめ、教職大学院OB、各校種教職員、教育行政関係者等の参加を得て、実践と理論の融合が目指された。

「ワクワク感」、それが理論と実践の融合による教育実践の高度化には伴走しており、学習のための学習ではなく、成長と発達のための学習を本気で創り出す。

なお院生の研究成果については、次回の当ニュースレターで報告の予定である。

基調提案

TESOL 研究に見る読解モデルについて
長崎大学大学院教育学研究科教授 稲毛逸郎



Profile 国際理解・英語教育実践コースにおいて、「英語科教育の実践と課題」「英語学力評価論」等を担当する。

■KEYWORD 読解プロセスモデル、Interactive approach, Sub-vocal rehearsal

本提案は、近年の国内外の TESOL 研究における英語読解プロセスについての諸見解を整理し、1980年代までにほぼ議論が落ち着いたと考えられる読解プロセスモデルを提示し、解説を試みたものである。まず、「読む」行為の基本概念として、書記号の音韻符号化の過程、意味概念の interpreting、そして書き手の意図の understanding へと段階を踏んで行く重層化モデルを提示した。次に、対象とする文章について、言語単位のより小さいものから大きいものへと積み上げていく bottom-up 型のプロセスと、内容に関するスキーマと形式に関するスキーマ、読みの目的、語用論的知識等を参照しながら読み解く top-down 型のプロセスについて解説し、この双方のプロセスをいかにバランス良く英語読解指導に取り入れていくかが重要な検討課題となる点を指摘した。

英語の文法と英語読解について
長崎大学大学院教育学研究科教授 松元浩一



Profile 専攻は英語学。近・現代英語における統語構造の発達と特性、意味構造と統語構造のインターフェイスを研究。

■KEYWORD 語の配列、否定、倒置、解釈の正確さ・精確さ

五線譜上の音符は、規則にしたがって上下左右に配置され曲を構成している。指揮者は、その規則にもとづいて五線譜上の音符を解釈し、音符配列の背後に潜む作曲家の意図・感情、ひいては、その国の歴史・文化を読み解くと言われる。連続する音符の背後には、いわば(言語音も同じく)、人間共通の、抽象的だが、普遍的な認識や感性が流れている。それらを理解するには、楽譜を「読解する」基礎訓練が大切で、音楽がもつ「文法、語法」(つまり作曲上の規則)の習得が欠かせない。ことばの研究や学習も同じである。日本語であれ、英語であれ、文が表す細かな意味の違いをすくい取るには、文法の習得は避けて通れない。通常とは異なる語の配列や文構造を用いるということは、標準的な配列では表現しえない意味がそこに込められているということである。意味を正確に、かつ、精確に理解するには、文法は重要である。文法を理解することは、われわれが世界をどのように認識し、解釈しているかを理解することでもある。

Integrating and Personalising the Reading Skill
長崎大学大学院教育学研究科准教授 BROWN, Anthony William



Profile Anthony Brown worked as an English teacher, teacher trainer and school manager in Britain. He currently teaches courses in Communicative Language Teaching and Academic Writing in the Graduate School.

■KEYWORD reading skills, communicative language teaching, integrated skills

This presentation attempted to describe the role of Reading Skills within the framework of Communicative Language Teaching. It particularly aimed to emphasize the importance of personalization and integration of reading with other skills, especially speaking - as a source of motivation in an area which can sometimes seem dry and demotivating. This is particularly a problem as many Junior High School and High School textbooks are dominated by reading passages. The presentation looked at examples of pre-reading, reading and post-reading activities, as well as stressing the importance of including extensive reading programs at all levels.

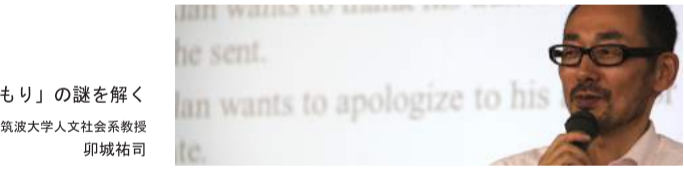
講演

英語リーディングの科学：「読めたつもり」の謎を解く
筑波大学人文社会系教授 卯城祐司

Profile 北海道教育大学副学長助教授、筑波大学助教授、文部省在外研究(連合王国ランカスター大学言語学部)などを経て、現在、筑波大学人文社会系教授、博士(言語学)、文部科学省「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想(英語教育に関する研究グループ)委員を務める。我が国の英語教育に関わる数々の要職を務める。

■KEYWORD 英語リーディング、読解プロセス、状況モデルの柔軟な修正

今回の講演会では、「英語リーディングの科学：『読めたつもり』の謎を解く」というテーマで筑波大学大学院・現代語・現代文化専攻の卯城祐司教授にお話しいただいた。講演では様々な英語のリーディングの側面を具体例と共に紹介していただき、英語のリーディングにおける指導上の課題と、読みの本質について知見を広げることができた。そもそも「読む」ということは、読み手が言語テキストから書き手の意図、つまり「何が言いたいのか」ということを理解することである。たとえば日常生活で新聞、小説、メールなどを読むとき、読み手は「書いてあること」だけを読んでいるのではない。それを読むときの状況、それまでの経緯、書き手、そして自分自身の背景知識(スキーマ)を活用し、本文には「書いていない」書き手の意図を推測・



イメージし、その人が伝えたい一番重要なメッセージを読み取る。同様に、英語の読解においても重要なのは、英語を日本語にする能力だけではなく、書き手の意図を読み取る能力なのだ。

近隣諸外国に比べ日本人の英語読解能力は劣っているとされる。それは言い換えれば「英語の読み方の訓練」が十分ではないということであろう。この点が日本の英語教育における読解指導上の課題である。「文法訳読法」(Grammar-translation)＝絶対悪ではないが、英語を読むときにどのような点が理解できないといけないうかを、読解のプロセスの上で体系的に指導していくことが必要である。たとえば、内容理解に必要な 1. Fact-finding 2. Inference 3. Generalization の観点、英文の種類(新聞なら逆ピラミッド型の構造)で読み方が異なること、談話の構造などにタスクを通して着目させることなどである。

これらの「読みの技術」を知り、さらに「情報整理」(Information transfer: 情報の転移)をすることで読みは深まる。読解力とは、相手の意図、話の大意を「予測」して「修正」していく能力であり、このような動的なプロセスが「読みの本質」である。(文責 M3 吉田竜真)

話題提供

英語の聴解と読解の関連性について
長崎大学大学院教育学研究科院生 吉田竜真

■KEYWORD 聴解のプロセス、読解のプロセス、学習方略

英語の聴解と読解の両者については関係があるともないともいえる2つの特徴がある。それは、題材の認識方法の違いと言語テキストの永続性である。しかし、情報処理の初期段階で違いがある一方で、いったんそれらを語や文の情報に置き換えると、その後のプロセスは読解も聴解も共通している。その共通するプロセスに、ボトムアップ処理とトップダウン処理がある。ボトムアップ処理とは、小さな単位を組み合わせて、さらに大きな単位としていくプロセスである。一方トップダウン処理とは、頭の中にある背景知識を利用し、全体から細部へと理解を深めていくものである。その両者の相互作用によって言語処理だけでなく意味レベルでも理解が促進される。(文責 M1 白根孝明)

中学校における「英語読解ストラテジー」の習得について
佐世保市立砥辺中学校教諭 松尾秀子

■KEYWORD 文、段落、ジャンル

コミュニケーション活動に重心をおく小学校外国語活動と語彙や文法、長文読解が中心である高等教育との間にある中学校では、必要に応じて学習を継続発展させるための読解力・文法理解力・読解のストラテジーの育成が必要である。他の三技能は単独で強化することは難しいが、読む力は読むだけで文法や語句の習得が可能である。私は第一学年では一文一文が理解できること、第二学年では要旨をつかむこと、第三学年では進路の実現に焦点を当てている。これらの実践は、授業を面白く感じる生徒の増加やキーワードを見つけて読む力の育成など英語学習全般で役に立っている。これらから生徒の実態を見据え、授業の改善向上を図っていきたい。(文責 M1 大塚理輝)

多読を通じた Writing 力の向上
佐世保市立砥辺中学校教諭 小宮昭子

■KEYWORD Reading Marathon

Reading Marathon と題して取り組んだ多読について紹介する。多読に取り組んだきっかけの1つは、自分の気持ちを自分の言葉で表現して欲しい、地道にどの子も授業中に出来ることを挑戦させたいと思ったからである。筆者は 200～300 語のペンギンシリーズを使用し、週に1回、50分授業のうち25分程度を Reading Marathon にあてた。その際、①自分で読む、②次の時間に記憶を戻すためのあらすじを日本語で書く、③まとまりの意味をとることができれば辞書を使わない、④自分で本を選ぶ、というルールを決めた。読むことは学習の基本である。Reading から Writing に繋げる活動を通じ、実際に得た表現を使ってみようという中学生の知的欲求を満たし、今後も楽しく Reading Marathon を続けていきたい。(文責 M1 他々木有輝)

高等学校における実践について
長崎県立長崎北高等学校教諭 吉田謙吾

■KEYWORD 語彙、文法、音読、リスニング、多読

高等学校において、現実的に大学入試に対応できる英語力を身につけさせなければならない。英文読解指導は非常に重要であるが、所属校では現在、語彙力・各種表現の定着、文法の定着、音読トレーニング、リスニング、多読・多聴を5つの柱として、多角的に指導を行っている。例えば、多読・多聴は、読む、聴く機会を増やし、慣れさせることを直接的な目的とし、ひいては、スムーズなリーディング、語彙の定着、読解力の向上が図られるように実施している。留意点として、使用する教材の難易度やジャンル、また問題形式等に多様性を持たせることがある。今後の課題に、指導の多角性に加え、3年間を通じた系統性を担保していくことが挙げられる。(文責 M1 前田悠太)



1日目は「教育実践研究コミュニティ長崎」と題されて、パネル展示による研究成果の経過報告を中心としたディスカッション、情報・意見交換がなされた。